

スラムに輝く子どもたちの瞳

中能孝則

★スラムを支えるボランティア活動

今回は、社団法人シャンティ国際ボランティア協会（略称：SVA）の方に案内していただいた。SVAの基本目標には『最貧困の子どもたちに夢と希望を！』とうたわれている。

主な活動は絵本の読み聞かせを中心にした移動図書館活動と各州の中心部にある学校に図書館を設置する活動だそうです。（理由の一つとしては、すべての学校にはとても手が回らない。中心部の学校で図書館活動が成功するとその回りにも徐々に広がっていく成果があり、現在はこの方針で進めている。しかし先はまだまだ長いとのことでした）

先日、日本のテレビで放映された島田伸介さんたちが絵画の競売をして売り上げた一部も SVA の活動に届けられているとのことでした。



＜田園風景の中に突如現れた郊外のスラム地区＞

★700 箇所を超えるスラム

スラムは毎年 50 前後増えており、今後ますます増えることが予想されるそうです。



政府は 2006 年から街づくりのために、プノンペンのある地域のあらゆる地域に無秩序に作られた大小のスラムの立ち退きを強行し、多くのスラム生活者が郊外に移転することを余儀なくされた。（私たちが訪問したところは市内からバスで 1 時間のところであった）

しかし、郊外では仕事が少なく、再び市内にあるスラムにもぐり込む人もいるとのことでした。ちなみにスラム生活者は 40 万人位といわれており、まだまだ増える傾向にあるそうです。

スラムでの生活は劣悪な環境と言っても過言ではなく、道路は舗装されておらず、赤土のままで穴ぼこだらけ、そこをはだして歩いている子どももいました。履いていたとしても靴ではなく、ビーチサンダルの様なものを履いている子がほとんどでした。

電気もなく、安心して飲める水も少なく、トイレも完全なものは少なく、私がトイレに行きたいと申し出て、学校内のトイレに案内してもらった。しかし扉に錠前が掛かっており、案内の人に開けてもらって用を済ませま

した。つまりいつでも誰でも自由に使えない状態でした。

なぜこうなのか質問もできないままに考え込んでしまいました。



<3~400万円前後でできる立派な学校だが>

★スラムの学校事情

この地区の学校を訪問し、最初に校長先生の話の伺う。

- * この学校の子どもの1年生の就学率は70%（全国平均の就学率は99%といわれているので、この地区の就学率がいかに低いか分かる）
- * 6年生まで進級できる子は50%に届かないのが現状である。（原因のひとつは弟や妹の面倒を見るために、学校行けなくなる。また、生活を支えるために年を偽って働きに出る。）



<絵本の読み聞かせに食い入るように見入る子ども>

学校の先生の給与は平均40ドルで、この額ではとても生活できず、ほとんどの先生が副職を持ちながら頑張っている。

◆校長先生の悩み

- ① 教材が不足している。
- ② 先生の給与が低すぎる。
- ③ 先生の数足りない。

※ノートや鉛筆を持っている子も少なかったように思う。メンバーも個人的に持って行った物を渡したが、とても足りるものではなかった。

★落ち込んだ私たちを救ってくれた輝く瞳

校長先生の話が終わるころ子どもたちのにぎやかな声が響き始めた、SVAスタッフの読み聞かせに歓声ははじめていた。

そして読み聞かせのあとは絵本の貸し出しの時間になり、我先にと借り出しては食い入るように読みふけていた。



<団員と一緒に遊ぶ>

★歌とマジックでお礼

訪問した団員も、交流のお礼に歌とマジックでお返しした。

メンバー全員で『故郷』を日本語と英語で合唱した。言葉は通じなかったと思うが、お互いに見つめ合う目と目に確かな心のつながりを感じた。

そして、すべての子どもたちの笑顔と瞳は澄み切っていて、実にすばらしいものであった。参加した団員たちにもこの澄み切った瞳を曇らせないために自分たちに何ができるか、何をしなければならないかを大いに語り合っほしい。



<言葉の壁を越えて折り紙で交流>



※マジックの不思議さにまるで、何かにつままれたようにぼかんとしていたが、種がわかった時の笑顔がこれまた最高でした。
(校長先生にお願いしてこの笑顔を書かせていただいた)

